

8月例会 「出張サロン in 清水」

【日時・会場】2001年8月25日(土)～26日(日) 於清水ナショナルトレーニングセンター(J-S T E P)

【参加者(会員)】荒井義行 浦和俊介 熊谷建志 高妻容一 笹原勉 澤井和彦 田中俊也 中塚義実 松岡耕自 宮城島清也 山下則之

【参加者(未会員)】小沢和明(盛岡市役所) 原田和子(刈谷市サッカー連盟) 橋本潤子(フリーライター) 戸村賢一(フリーライター)

【地元参加】中島巖(清水サッカー協会会長) 浄見元紹(〃副会長) 牧田博之(〃理事長) 大村博哉 望月和男 井出龍一郎 難波邦雄(静岡大学)

スポーツが大好きな子供たちを育てよう

ープロを目指す子供たちと地域で楽しみたい子供たちのために何が出来るか？

<目次>

【事例発表1】 「DUOリーグ-学校運動部とクラブユースによるリーグ戦」

DUOリーグチェアマン/筑波大附属高校教諭 中塚義実

【事例発表2】 「地域クラブU18～清水の事例」

清水サッカー協会常任理事 宮城島清也

【事例発表3】 「Jリーグユースチームの育成」

名古屋グランパスエイト育成普及部 山下則之

<全体日程と主な出来事>

【事例発表1】

「DUOリーグ-学校運動部とクラブユースによるリーグ戦」

DUOリーグチェアマン/筑波大附属高校教諭 中塚義実

DUOリーグの事例と、筑波大学附属高校サッカー部の試みについて報告した。内容については4月例会報告(サロン2002HPに掲載)を参照されたいが、新しい話題も含め、以下の点を付け加えた。

1. DUOリーグの財政について

初年度(96年度)前期リーグでは参加費を徴収しなかったが、後期からは「チーム」ごとに徴収することとした(1チーム15,000円。2000年度より18,000円)。参加費は全て、ゲームを行うための経費として支払われる。具体的には審判手当てや付き添い大人手当て、会場費などである。

2000年度からプログラムを作ることにしたが、これは外部へのPRとともに、DUOリーガー（高校生プレーヤー）へのメッセージであり、証でもある。会費 500 円でDUOリーガーとなった高校生プレーヤーは、その見返りとして、前期・後期と 2 冊のプログラムが手許に届けられる。そこには様々なメッセージが掲載されており、各チーム紹介だけでなく、「スポーツ」のあり方を学ぶ場ともなっている。こんなイメージである。

しかし、年会費 500 円で、1 冊 400 円弱のプログラムが 2 冊配布されることは、リーグにしてみれば大赤字である。そこで、プログラムの製作コストを押さえるとともに、加盟クラブから「加盟費」を徴収し、運営資金に充てることとした。プログラム作成を含めた「リーグ組織のための経費」はクラブ加盟費とプレーヤーからの会費で、「リーグ戦事業を展開するための経費」は参加チームからの参加費でまかなうという構造が確立した。

どの協会・連盟でも本来はこうなのだろう。理念に賛同する者が会費を払って組織の基盤を作り、各事業、各イベントは単体で独立採算とする。DUOリーグでは現在このような形で展開していこうとしている。今後は、理念に賛同する企業や団体からの広告収入を得る努力もしていきたいが、あくまでも理念が先にある。スポンサーの意向が先にあるのではない。

2. DUOリーグの拡大

現在、東京都ユースリーグ創設へ向けて着々と準備を進めている。2001年度より、東京都高体連の各地区より「ユースリーグ設立準備委員(仮称)」を選出、この9月より各地区にて、DUOリーグをモデルとした「プレリーグ」を開始することとした。高体連もクラブユースも一緒に「衛星型サッカー環境」（末端からトップレベルまで、近隣から関東全域まで、階層的にリーグが組織されている構造）を目指している。

3. 筑波大学附属高校サッカー部の試みーその後

サッカーが好きな人の集団である「サッカークラブ」内に、競技者を志す「サッカー部門」と「女子部門」があるところまでは報告していたが、2001年度からは「フットサル部門」も活動を開始するようになった。各部門には主将がいるのだが、今年からは、各部門（即ちチーム）の長だけでなく、クラブ全体の長を決め、学校の中で「サッカークラブ」をどうやって育て、周囲に認めてもらうのかについての検討を進めている。

これらの議論に、顧問としては理念的なサポートやアドバイスはするが、基本的には生徒が議論を進めている。また、女子部門のホームページ 上で熱い議論が戦わされている。

4. フットサルのユース大会もはじまった

東京都サッカー協会では、今年からユース(U-18)フットサル大会を開催、個性的な 12 チームが集まり、第 1 回大会を行った。筑波大学附属高校サッカークラブ・フットサル部門もこの大会に出場した。高体連のサッカー部で作ったチームあり、サッカー以外の部から助っ人を集めて編成したチームあり、体育授業のメンバーで来ているチームもあり、本格的なフットサル部もありと、非常にバラエティに富んだ顔ぶれとなった。

私は実行委員長としてこの大会にかかわったが、今後はサッカーを、リーグ戦中心に構造改革し、サッカーのオフシーズンにフットサル大会を行う形を考えている。それも年 2 回程度行い、夏はフットサル中心にやっている者が参加しやすい形で、冬はサッカーのオフシーズンのトレーニングとして取り組む者とフットサル中心にやっている者が集まる大会として育てていくことができればよいと考える。

【事例発表 2】 「地域クラブ U 1 8 ～清水の事例」

清水サッカー協会常任理事 宮城島清也

参考：「人を育てるクラブづくり」『指導者のためのスポーツジャーナル』2001 年 4/5 月合併号 財団法人日本体育協会（クラブネッツ <http://www.clubnetz.or.jp/journal/journaltitle.htm>）

1. 清水市のサッカーを取り巻く課題

- ・ 小学生年代：少年団員が減少しているが、少子化だけが原因ではない。子供たちの生活の中で、テレビゲームや塾通いなどの比重が増え、以前ほどサッカーに熱中しなくなった。また、親たちにとっては送迎などが負担になり、子どもも大切だが自分も大切という親が敬遠するようにもなった。
- ・ 中学生年代：教員指導者の高齢化、減少が、部活動の質の低下をもたらしている。また、それに替わる受け皿としての地域社会主体の活動については、学校側の理解のなさ、地域側の能力不足を合わせてなかなか進まない。
- ・ 高校生年代：この年代の問題は、中学卒業と同時にサッカーを辞める選手たちがたくさんいるということ。高校部活動へ進んでも、指導者と衝突し部活どころか、学校も辞めてしまう選手が少なくない。部活動チームの中でも、多くの選手は試合への出場機会が極めて限られている。また、中卒で就職した選手たちは、そもそも活動の場がない。
- ・ 大学、20才代：この年代は、同好会型のクラブチームが主。自由な集まりで気楽というのはよいが、会場の確保とか、人数合わせで苦勞する場合が多い。
- ・ 30才代、40才代：父親／母親チームでサッカーを楽しんでいる。しかし、一方で、少年団・大会運営などボランティアとしての負担が大きい。

- ・ 50才代以上：最も、サッカーを楽しんでいる世代であり、今年度から60才以上のスーパーシニアリーグを創設した。参加者数150名、4チーム。

2. 清水のサッカーが提案する地域スポーツクラブ

- ・ 市民体育大会サッカーの部（平成8年度～）をきっかけに地域スポーツクラブづくりを始めた。この大会は、地域の対抗戦（表1）で、17のカテゴリーに分かれて行われる。地域全体の代表者は、少年団組織の指導者とか、長年、地域の顔になっている人が多い。

- ・ 市民大会をきっかけにして、年齢・性別を問わず、誰もが参加できる図1のようなクラブづくりを目指す。学区を単位とするが、人数や経営的な面から複数の学区の連合も可。完全な有給クラブは無理なのでボランティアスタッフによる運営が主になるが、指導者などは有給で確保したい。ポイントは、すべての年代を串刺しすることで人材が育っていく点。

- ・ 学区単位でつくる理由としては、生活圈やインフラとしての学校グラウンドの存在など、一般的に言われていることのほかに、清水の強みであるスポーツ少年団を活かせるという点が大きい。

- ・ 20代の選手を主としたセレソンと、U18の男子はこれから増えていきそうである。U12（小学生年代）、U15（中学生年代）は維持と向上が必要。女子は、まだ、全般に選手数が少ない。その他、クラブ化にあたっては、指導者、施設、お金などの確保が必要である。

3. 地域クラブU18

- ・ この取り組みは、市民大会のU18というかたちで、平成9年度から始まった。初年度より参加チームは10～12チーム前後で推移している。

- ・ 今年の参加選手10チーム139名だったが、内、103名は高校部活動またはクラブユース等に未登録の選手、つまり、プレーの機会がない選手である。この年代になると、自分たちで自主的にチーム運営することも可能だと思われるが、実際には審判の手配などで問題も多いので社会人を代表者にすることと決めている。参加する少年たちは、一見すると色とりどりの頭髪やピアスなどをしている者も多い。プレーは、とても一生懸命でラフプレーは少なく、また、ずるいプレーも少ない。

- ・ U18の課題としては、この大会のためだけの即席チームが多いので、日常的な活動へどのようにつながるかということが挙げられる。中でも、清水サタデーFCのようにU15～成人が集まりボールを蹴っているチームや、高部EASTのようにU18の現役とOBで市の社会人リーグに参戦しているチーム、また、親子でチームを組み協会主催のフットサルリーグに参戦している興津FCのようなチームもある。

・ この年代層を対象とするとき、障害となる点としては、扱いの難しい年頃であるということが挙げられる。親しい友人同士で集まりやすく、学年を超えたつきあいができないとか、気まぐれというような点がある。また、費用負担、移動能力の点からも難しさがある。

・ 今後は、受益者負担を明確にし、試合形式のリーグ戦にも取り組みたいと考えている。そのとき、審判の確保や人数不足を解決するためにフットサルがよいと考えている。

4. 今後の方針

まず、清水サッカー協会のNPO法人化（本年11月を予定）で、スタッフと財務の強化し、地域スポーツクラブづくりを推進したいと考えている。

◆ 質疑応答

Q. 清水にはグラウンドはどのようなものがあるか？

A. 公共のグラウンドとしては、芝生が6面、土のグラウンドが5面ある。土のグラウンドの内、2面は山の中、2面は富士川の河川敷にありアクセスが極めて悪い。実際に主な活動場所になっているのは、小中学校のグラウンドでナイター施設が整備されていて、ほとんど毎日のように使われている。ナイター施設も、昭和40年代にサッカースポーツ少年団の育成会が中心になって市民が整備したものを、更新のときに行政が整備してきた。

Q. グラウンドは簡単に借りられるのか？

A. 学校グラウンドは学校の体育施設利用者協議会で利用団体が調整しながら利用する。公共グラウンドは市全体のグラウンド調整会議で調整する。サッカー協会がまともに年間予約すると、すべて埋まってしまうので制限がかけられている。

【事例発表3】 「Jリーグユースチームの育成」

名古屋グランパスエイト育成普及部 山下則之

<プレゼンテーション>

(1) 発表趣旨、優秀な選手の確保、グランパスの一貫指導体制の仕組み、育成普及活動のハードとソフト

(2) 三好町での実践、キッズサッカー、科学の目から見たサッカー、活動の広がり

<ディスカッション>

<プレゼンテーション> (一部ディスカッションでの応答も含む)

■発表趣旨

Jリーグ百年構想が始まってから、まだ10年。これを第一ステップとして、第二ステップの今後10年の取り組みについて、一般的に成り立つこともあるし、グランパスのホームタウンだけで成り立って他では違うということもあるが、私たちが考えているプランを提案する。

■優秀な選手の確保

○我々はプロクラブであるので、優秀な選手を育てなければならない。ただ、テーマとしては「優秀な選手の確保」となっているが、実際の活動は普及活動の方が多い。

○コンディショニングには、トレーニングのコンディショニングだけでなく、地域のコンディショニングというのもあると思う。地域のコンディショニングとは、サッカーやスポーツをする環境を整えるということ。底辺から「ライフスタイル」「心身のコンディショニング」「ゲームパフォーマンス」で構成される三角形をコンディショニングによって改善し、全体を大きくしていくことが大事である。地域のコンディショニングは、10年、20年かけて大きくしていくという考え方のもとで進めなければならない。

○子供たちを育てていくことが中心。宣伝ポスターに子供の写真を使い、チケット販売のポスターをつくった。また、ストイコビッチのような選手をどうやったら育てることができるのか、ピクシーをイメージしながら色々な活動を進めている。

○コンディショニングを成立させるには、環境、施設、計画、コーチングスキル、スタッフ、経費、管理の7つの要因をしっかりと掴まなければならない。

○そして、コンディショニングのコンセプトを作成していく中で、地域の情報、世界の情報、医科学情報を取り入れ、まず、コーチを育成してから選手を育成する。コーチというのは日本サッカー協会でもS級、B級、C級とか資格を設けているが、我々プロクラブは、チームのコンセプトにあったスペシャリストとしてのコーチを育成しなければならない。

○自分たちのやっていることが世界のサッカーに通用しているのかどうか、色々な年齢の子供たちを海外に連れて行き、子供たちの戦術や技術を比較して、我々の指導が正しいのかを評価し、世界とのギャップを確認することが大事。

■グランパスの一貫指導体制の仕組み

○普及と育成がお互いに連携をとりながら、5歳の子供たちから21歳の青年まで、基本コンセプトを指導者全員が理解する必要がある。年齢別指導項目の統一、年間・期間・毎日の計画書の作成、指導結果の評価の仕方、指導者間の連携など、この年齢にはどういうことをどこまで教えるかなどを整理する。

○それを伝えるのが2週間に1度行われる勉強会。また、週1回グラウンドでの伝達講習会があり、集まったコーチの内、1人がコーチになって、他のコーチが選手としてゲームを行いディスカッションする。これらをまとめてクラブ内で年2回発表会を行い、報告書を発行している。

○登録については、普及・育成段階では個人の自由で、中学校で登録したい子は中学校で、グランパスで登録したい子はグランパスで登録する。強化の選手はグランパスエイト登録。

今の問題は、現行のクラブユース連盟の規約では、強化部と育成部の行き来ができないこと。育成部に登録した子は強化部に上がれず、強化部にいた子は育成部に下りられない。こうした環境を整備していかなければならない。

プロを目指して夢を持って挑戦したけど、失敗したらその子を誰も受け入れてくれない。進めなかったときにどこに戻って楽しむんだということになってしまう。

○強化の子供たちは、トップチームと同じ所で活動している。将来的には、一つのチームではなくて、地域の部分でやって合同トレーニングをして、高校生になるときに、プロに行くかどうか自分で判断したらどうか。こういう方向に何年かかけてやりたいなと思っている。

■育成普及活動のハードとソフト

○育成と普及をあわせて、スタッフは僕を含めて全部で23人。そのうちコーチが19人で、あと管理、育成、普及、地域をまとめる担当をおいている。地域に出かけてサッカー教室のコーチをやってくれるのは全部で10人。そのほかにコーチと地域でつながってくれている人が徐々に増えている。静岡ではあたり前のことかもしれないけれど、世話役の横のつながりが出来始めた。

○クラブ運営には、地域住民組織と地域スポーツ組織の交流が必要だと考える。今まではサッカーに関わってきた人材を集めてきたが、トヨタ系列企業とか、中日新聞とか、出資企業から出向というような格好でフロントやコーチを出してもらいたい。また、大学生のインターンシップや、企業からリストラされた人材の活用も考えている。

○自治体や出資企業のハード、特に企業グラウンドは夏休みになれば誰も使っていないのだから、それを活用していきたい。企業にとってはイメージアップにもつながるだろう。昨年からはトヨタ自動車堤工場の厚生施設を借りて5歳から8歳までのスクールを開講した。ほかに名古屋スポーツガーデンという、ボーリング場を半分改造したインドアのフットサル場でも同様のスクールを開いている。

来年度は、西三河、尾張、東三河でもやりたい。企業とタイアップし、企業の施設や人をうまく利用しながら、企業のイメージアップも含め、育成体制を整えたい。

○例えば、工作機械をつくっているトヨタ工機の柔道部の人たちは、地域の子供たちを集めて週1回柔道を教えているが、もともと暗いイメージがあったトヨタ工機は、そのような地域との交流を通じて明るいイメージを作り出した。

<プレゼンテーション（２）>（一部ディスカッションでの応答も含む）

■三好町での実践

○ グランパスは三好町の施設を借りて、スクールを三好町と一緒に作り上げている。８年前から三好町の教育委員会、体育協会、サッカー連盟と連携をとりながら、三好町、グランパスとギヴアンドテイクで活動を進めてきた。当初は小学校４，５年生から中学１年生まで２０人くらいでさみしくやっていたが、８年の間に、幼稚園から始まって高校生まで育て、大人も含めた町民大会を開催するに至った。

○元々、三好町は野球の強い町で、野球のスパイクを履いてサッカーしにきていた。それが今は４００名を超える選手がいる。ハードと指導者の関係でこれ以上は増やせない。基本的には普及活動だが、この中から、グランパスのセレクションを受ける子が増えている。つまり、初めはプロを目指す子はいなかったが、今は普及と育成のつながりができた。

○三好町では補欠でも試合にでられるようにリーグ戦をやっている。２００１年からは１６歳リーグを開始し、将来的には５歳から２１歳まですべてリーグ戦ができるようにしたいと考えている。そして、総合型地域スポーツクラブを目指す。それをサッカーがリーダーシップをとりやっていきたい。

○この８年間で三好町は、いくつかのグラウンドをつくってくれた。クラブハウス、照明を完備した芝生ピッチの旭グラウンド。三好丘桜公園野球場は、外野の芝生の部分にサッカーゴールを設置し、野球と一緒に活動できるようにした。南部地区コミュニティ広場の野球場は、照明灯のある土のグラウンドだが外野にゴールを設置した。

ほかに、人工芝の黒笹公園グラウンド、農水省の予算でつくったさんさんの郷グラウンドがある。学校のグラウンドにも照明がつき、学校開放も進んだ。このように自治体と一緒に始めて始めた活動が広がりつつある。

■キッズサッカー

○５，６歳から、サッカーではなく、スポーツの遊びを始めて順番に育てていくことが大事。このような活動が始まらないと、日本のサッカーがＷ杯でベスト４に入るのは難しいと思う。ユースやジュニアユース年代から頑張っても、世界とのギャップが埋まらない。

フランスも１２，３年前から、サッカーではなくスポーツの遊びから始めた。我々の取り組みの結果が出る頃、私が生きているかどうかはわからないが、１６年から１８年くらい経ったときに結果が生まれるのではないだろうか。

○今、力を入れているのは幼稚園へコーチが出向いてボールに親しむという教室。豊田市には公立幼稚園が２０あるが、その授業時間中にコーチが出かけていって、サッカーだけではなく、トランポリンや平均台など、いろいろなスポーツの遊びをやっている。２０の幼稚園にバランス良く回ろうとすると、一箇所につき年間８回くらいで合計１６０回が限度。

また、コーチと子どもだけでなく、親も、地域のボランティアも一緒にやろうとテスト的にやってみたと

ころ、おばあちゃんの参加もあって良かったと思う。こういう活動の中に、グランパスのコーチがずっといるわけにもいかないの、地域や親子やみんなが係わっていかなければならない。

○プロになるのが無理だと高校生年代でわかって、それはクラブとコーチを信頼してやってきた子どもたちの責任ではなく、サッカー協会だとかJクラブの責任じゃないかと思う。人間が発育していく部分を勉強しながら、どこから何からはじめたらいいか見なおさなければいけないというのを感じた。幼稚園くらいの子たちに、サッカーじゃなくてスポーツ、外で遊ぶことから教えるということと、幼稚園の先生やお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒になってやるということが大切。グランパスも5、6歳で何をしたらいいか、技術、戦術、体力の面でどうしていくかは考えているし、それぞれの分野のプロフェッショナルとコミュニケーションを取りながら作っている。

○子どもたちはプロになりたいと言っているけれど、言っていることとやっていることがまるで違う。家の中でファミコンやって僕はサッカーのプロになるといっても、なれるわけではない。それをどのようにして外に引っ張り出して、汗をかくのは楽しいと感じさせるか。大きな課題である。

■科学の目から見たサッカー

○私たちは1995年から育成普及部が様々な科学的データを集めているが、トップチームデータをトップチームに返してもしかたないと考えている。そのデータを下部組織でいかに活用するかが大事。

○今、調べている内容は、移動距離とか移動スピードといった動きやパスなどトップ選手のゲーム分析、トップ選手からジュニア選手までの体力、あるいはキックの分析などである。中でも、ケガについては、幼稚園の子供たちを測定しながら、お父さん、お母さんと一緒に地域の先生にも協力していただきながらやろうとしている。

■活動の広がりと今後

○刈谷での、ハンディキャップを持った人たちのスポーツのサポートに、選手たちも参加している。選手はクラブの中だけでなく、地域のいろんなところで信頼されるようになる必要があると思うので、このような活動にも積極的に取り組んで行きたい。行く選手にとっても勉強になると思う。

○我々は、下部組織を試行錯誤で変えてきた。しかし、クラブの組織を変えようとするとき、一番の問題は子供たちが犠牲になってしまうことであり、子どもや親、地域に対しての責任を感じる。自分たちだけよければよいというのではなくて、Jクラブとしては、地域のためを考えたシステムを考えていかなければならない。

○育成というよりも普及のイメージの方が強い。トップチームが勝った負けたは小さな話。市民全体で子どもたちの将来を考える方がもっと大きな話ではないか。トップチームが2部に落ちてもいい。だけど、下のベースがしっかりしているというのがプロクラブの地域に対する責任じゃないかな感じている。

<ディスカッション> (山下氏の発言は「○」で表示、その他は「●」)

- (1) 協会のトレセン活動とクラブの育成普及活動の関係、学生のインターンシップについて
- (2) 早期指導の内容、多様な受け皿としての地域クラブを目指して、指導者の評価
- (3) 清水サッカー協会のNPO法人化、活動をささえるスポンサーと組織のあり方、最後に

■協会のトレセン活動とクラブの育成普及活動の関係

● 今までの日本サッカーの育成は、日本サッカー協会がトレセンシステムを運営したり、高校サッカーを企画したりと、サッカー協会の枠の中で動いていた。指導者も本業を別に持っている人たちがボランティアでやっている。そこへJリーグができて、ヨーロッパ型のスポーツクラブをつくらうということで、例えばグランパスがこういったビジョンを持って進めている。そういう活動がいままでのシステムとどうやって融合していったらいいのか。それが非常に大きなテーマ。

例えば、スペインのバルセロナには街の中に 200 のクラブがある。100 年という歴史の中で、プロ選手上がりの人が自分で財団を作ってクラブを作っている。こういう育成システムで、子どもたちを育成している。そういうクラブが自由に競い合っている。うまい子は引き抜かれ、良い選手はどんどん上に上がっていきける。クラブ間でリーグ戦を行っており、そこにはサッカー協会が入っていない。バルセロナには市レベルのサッカー協会はない。州レベルのサッカー協会が一つあって、州選抜などを構成して州の対抗戦をやったりする。そういうようなサッカー協会の位置付けになっている。

クラブが中心となっているスペインのようなやり方の対極に日本のサッカーがある。アマチュアレベルで育ってきた日本のサッカーの中で、Jリーグというプロの集団が理念を掲げて登場した。グランパスが考えている理念そのものをどういう活動で共有していくのか。

○トレセンについては、一緒に地域を担当する人が愛知県サッカー協会技術委員会の強化部長をやっているので、彼がトレセンの考え方を作りながら、グランパスの施設を開放して、グランパスの選手やコーチも関わって、できるだけ愛知のトレセンに協力しようという動きが出てきている。

ただ、クラブのユースやジュニアユースの活動がうまく動いていかないとコーチの評価の部分でまずいことになる。トレセンが良くてクラブの子を育てられなかったらコーチの評価は落ちていく。バランスを取るのが非常に難しい。

今まで、トレセンとグランパスの活動に壁があった。愛知のレベルをもう一つ上げないと、現状ではプロ選手を作るというのは考えられない。まずトレセンに、我々の持っているハードやソフトを提供し、協力していく。考え方を今年から切り替えた。

●今まではトレセンとクラブが別々の活動で、地域の側からするとグランパスのことを理解する機会もタイミングもなかった。山下さんの下にいるトヨタグループの出向の方が、県協会の立場で、私に「西三

河トレセンを頼むぞ」と言われた。最初は意味がわからなかったけど、グランパスと一緒に協力して、施設も貸してもらえると条件があるならば一緒にやりましょう、ということで話が進んできた。2月から3月頃に言われて、トレセンをこのようにやりますという書類を

80 チームに出したら反響がすごかった。苦情の電話から何から。今までは、「12歳までは育てます。学校に行ったら学校に任せるでいい」という形だった。だから今、クレームや意地悪いってくる人たちにこういうシステムがあるので、基本的な考え方を出してそれを各チームに送って理解活動をしている。

中学や高校では、学校の先生で頑張っている方もいらっしゃるの難しいが、U12のあたりから下の年代からはじめればいい。地域で育てるという基本線が出ているので、将来的には中学生も高校生も西三河など地域で育てるということになる。そうなれば、小さい子から持ち上げていける。

西三河ではクラブチームはまだ強いので、トレセンは月1回しかできない。完全週休二日になればもう少し考え方が変わる。とにかく今は理解活動。「トレセンって何？」という指導者に冊子を配るところから始めている。私は今まで女子をやっており、少年の方には全くしがらみがない。いきなりだったが、今は良い感じで進んでいる。

○愛知県のトレセンがやりたいのなら、ハードは開放する。そこでいい思いをしてもらう。グランパスの芝で楽しくやっているのをみれば、やりたくない人もやりたくなるでしょう。そういう人を増やそう。やりたい人はどうぞ来てくださいという方向に今年から切り替えて、クラブのトップからトレセンには協力しようとなっている。

■学生のインターンシップについて

●某大学の体育学部でコーチングコースを担当している。コーチングコースはコーチ育成。サッカー部はアスリートコースで選手だけだが、少しずつ僕のところにも来るようになり、うちのゼミでサッカーやっている子が3人いる。インターンシップの話はいけるかなと思う。大学のカリキュラムを変えなければいけないので非常に大変だが、学生の方は、1年間グランパスさんが受け入れてくれるのなら1年長く大学へ行ってもいいと言う人は絶対にいる。僕のゼミの子で大学院に行こうとしている子がいるが、大学院を3年で抜けてもいいと思う。1年目に基本を習って、2年目にインターンシップやって、3年目にそれを含めて修士論文を書く。そして、その子達をJとかいろんな企業の、僕のやっているのはメンタルコーチですが、そういった分野で役立てていく。

○来年から、順天堂の学生が3年生までに単位を取って残り1年来てくれるという風になっている。

●うちのサッカー部は毎年2人ブラジルに行かせる。1年間そういうことができるが、最近ブラジルに行っても勉強になることがないということで行かなくなっている。1、2人くらいなら、それをこちらに一年とか半年とか遣すのは可能だと思う。

○幼稚園は女の人ばかりでやっている。男の先生がいない。子どもを育てるのに女性だけでいいのか、バランスを取らないといけないと思う。そういう意味からもコーチを出しているのだが、子どもはすぐなついてくる。そういうところでインターンシップの受け入れを考えていきたい。採用する自治体の側としても、学生を早く見られるわけで、次のリクルートにつながる。こういう活動をJリーグの方へも発している。グランパスじゃなくて、Jリーグで受けて、2、3ヶ月講習を受けて各クラブに出していくような活動ができないだろうかという提案をしている。こういうところをもっと教育してもらえれば、ハードの部分と人材の確保の部分が非常に楽になる。

<ディスカッション(2)> (山下氏の発言は「○」で表示、その他は「●」)

■早期指導の内容

●遊んでくれると同時に、基本的な技術をどこで、どの年代で教えるか。中学生でもインサイドキックができない、インステップキック蹴れない。高校まで6年間やっても直らない。ただ、最初の時にどういう技術的なことをやるか、遊びの中で子どもにやらせてみると柔軟にやる。

○幼稚園で先生や豊田市と話をしている中で、一番基本となる正しい歩き方からやりましょうと。豊田市が日本のモデルになるような、そこから始めようと。子どもたちの靴を見たら、ひも靴なんかひもを縛ったままでかかとを踏んでいる子がいっぱいいる。これでは正しい歩き方はできない。幼稚園のスリッパはどんなのを履いているか。スリッパは鼻緒のついたのにしましよとか、課題がいっぱいある。正しい歩き方ができない子は次のステップ行けないので、それをまずやって、正しく走れて、それを豊田市から全国に発信したらどうか。大きな夢だが、今、やりだそうと思っている。

●歩き方について、共通の正しい歩き方というものが提示できるんじゃないかと思うが、スポーツごとに分けていく必要もあるのでは。サッカーの歩き方と陸上の歩き方、柔道の歩き方と違うと思う。自分も小さい頃、自問自答しながら、どういう風に歩いたらいいか考えていた。例えば、信号機で止まって一歩踏み出す前の待っている姿勢とか。柔道だったら重心の置き方、移し方とか違う。そうなってくると、どこまでを示してあげればいいのかなど。

●それについては、私の大学でストレングスコーチ育成ができていて、基本的な動き方の理論もトレーニング方法もできている。全種目共通なものがあって、その中で競技によって別れていくのではないかな。基本的なものはすでにできている。ただ、日本は横のつながりが希薄なため必要な情報を伝えることができない。サッカーは心技体のバランスが非常に悪い。コーチは技ばかり。心体の専門家がなかなか入れない。コーチは技術を知っていても伝えるのが下手。一方通行。

■多様な受け皿としての地域クラブを目指して

●山下さんの話を聞いて感じたのは、底辺の大勢の選手たちはトップを生み出すためにあるのではないということ。地域にはいろいろな子がいて、その中にはトップを目指せる力を持った子がいるし、そうじゃない子もいる。トップを目指せる力を持った子にとって一番良いスポーツ環境は、力をつければトッ

プに上げられる環境。そうじゃない子にとって一番良いスポーツ環境は、日常の中でスポーツを楽しめる環境。どっちが上とか下とかなと思う。山下さんが提案されているのは、その両方を含んだ全体のスポーツ環境をバランス良く上げていかないとどっちのためにもならないということだと思う。それは非常に素晴らしい。清水の場合、現場主義でイベントに追いまわられていてこういうのを考えている人がほとんどいない。ここで言われているのはグランパスのあり方ではなくて、地域全体のスポーツのあり方を提案されていると思う。

●アヤックスはオランダのトップクラブだからプロになる子を中心に育てていて、その周りに、それを支える衛星クラブがいっぱいある。アヤックスでは18歳までは毎年2人入れ替えをする。入って満足してしまう子は伸びがないから、絶えず危機感を与える。もちろん学業成績が落ちたりしてもはずす。毎年、16人くらいの中から2人落される。その空きを目指して衛星クラブの中から自信のある子が受けにくる。500人くらい受けに来る。その代わりアヤックスでは、18歳まで残ったら必ずプロの選手として面倒をみる。それまでの教育をクラブでしてしまう。選手生命が終わったらコーチの資格を取らせて2か国語を話せるようにしてどこのクラブに行ってもレクチャーができるようにする。歴史と伝統がある。

■指導者の評価

●指導者の評価について、誰がどういう面でやるのか確立されていない。小、中バラバラの指導。今はチームがいかにして勝ったかが唯一の評価基準。グランパスではどうやっているのか。

○うちの場合、コーチのインストラクターが一人いる。その者がコーチをコーチする。さらに年1回学科テストを行っている。100点満点の評価表を持っている。それに基づいて給料も決まっていく。勝った負けたではない。具体的に指摘できる。

●それは企業秘密ですか（笑）。

○秘密じゃないけど考えるのに物凄い時間がかかっている。

●それは育成じゃなくて全コーチにですか。

○育成だけ。トップは勝った負けたで判断。育成の部分でユースからサテライトのコーチに上がるところまで作ってある。それはコーチに見せている。本人との面接によって、なぜ給料があがらないのか説明する制度となっている。

●一般企業でも業績評価とコンピテンシー評価の2種類がある。達成された結果ではなく、繰り返し行うことのできる行為(コンピテンシー)そのものが評価の対象となる点、および、上司と部下とが面接によって業績やコンピテンシーを確認していくプロセスが、コーチの評価と似ている。

○厚生手当のようなものはない。コーチの評価のみ。実際、他でアルバイトをしている人もいる。そこから上を目指している。

●企業も属人的なものを廃止している。給料とはその人が生活できるように払っているのかその人が会社に何を与えてくれるのかで払っているのか。後者の考えに移っている。リストラされた人がやりたいと思うモチベーションに成りうる。

<ディスカッション (3) > (山下氏の発言は「○」で表示、その他は「●」)

■清水サッカー協会のNPO法人化

● 山下さんの話を聞いてうらやましいのは、有給の職員が、自分の能力を発揮できるサッカーで、最初は収入が少ないかもしれないが、それでも食べていけるということ。グランパスがそこまでできるのは、親会社が安定しているからなのかもしれないが、清水協会のNPO化もボランティア指導者がなんとか食べていけるような環境を作ろうという所からきているのだろう。では清水がスポーツでお金を回していくにはどうしたら良いのか。このテーマは、全国各地にあるのではないか。

●昔は指導者が学校の先生で勤め先が保障されている所でやれた。それがだんだん、社会人のボランティア指導者になっている。5時まで仕事をやっている人たちがどうやって出てくるのか。受け皿を整えていかないと指導者の質も落ちていく。そういう中で、エスパルスが指導者を受け入れて地域に出していくというのがベスト。しかし経営的な部分もあって抱えきれない。そういう発想がないというものもある。その部分の意識転換をしてもらいたい。そういう中でサッカー協会はどうするのか。NPOになったからといって何十人も抱えることはできない。法的に認められても資金が急に潤沢になるわけではない。簡単に行かない。

■活動をささえるスポンサーと組織のあり方

○資金の関係で、三好町の例だと、地元の「みやま工業」が運営費用を出してくれる。育成普及の部分は自給自足が原則だと思っている。サッカー教室をずっとやっている名古屋トヨペットという会社がある。そこから協賛金を、毎年、8年間出してもらっている。

●「みやま工業」は何を作っている会社なんですか。

○小さな部品を作っている会社。社長がサッカー好き。

●社長の道楽でやっている会社は、お金をかせなくなってくる。協賛に頼る方法ではなくて中塚さんがDUOリーグでやっているような参加費を取るような形をとらないといけないのでは。

○個々のチームも参加費を払っています。両方で運営をして、グランパスの持ち出しは今はない。

●トヨタグループのボディを作る会社がある。その会社が創立40周年で企業のイメージを明るくするため、車体カップという大会を開催。その後、協賛金を10年間出している。イメージアップを図っている。実際変わった。働いているお父さんが、地域に貢献していることを示しているため、喜んでいる。

●うちの会社も何年か前にテレビCMを出した。石油プラントを建てる会社。CMを見た人が石油プラントを注文するわけではない。リクルートのため。イメージアップにもなった。しかし、会社が厳しくなると広告費を削られる。直接利益と関係ないから。

●トヨタ車体は県リーグのサッカー部があったが廃部寸前だった。そこで、サッカー部をボランティアの柱に使ってもらう。運営から審判から。その大会をサッカー部にやらせることが地域に貢献することになる。それで救うことができた。

●刈谷は、働いている人が刈谷とかその周辺地域に住んでいる。だから、そういう仕掛けをしても元がとれる可能性が高い。首都圏だったらうまくいかかわからない。

●例えば、デンソーさんなんかサッカーにすごいお金を出している。デンソーカップや日韓戦とか。●むちゃくちゃ出しているけど、デンソーはJFLにはシビア。決して赤字にはなっていないけれど。ボランティアがいろいろやってしまうので。ライン引くとか。デンソーサッカー部の人たちにはそれを知ってほしい。こういう人たちのお陰だと。

●トヨタグループさんはそれぞれ素晴らしい施設を持っている。うちの会社なんかも、芝のグラウンド3面持っている。8個工場があれば、8面あるみたいな。最近、情報公開が進んで地域の方が会社の中に入ってくる機会ができた。貸さざるを得なくなってきた。

○企業の中に子供から大人までピラミッドができればそれはまた企業のPRになる。モデルを作りながら増やしていきたい。豊田の田舎に住んでいるからできることではあるが、それを広げていきたい。

●この辺だと小学校、中学校のグラウンドになる。エスパルスが直接学校のグラウンドでやるというのは抵抗がある。営業になるため。主体はコストは、協会なりボランティアがセッティングをしましょう。そこにエスパルスのコーチなんかを呼んでできないかなと考えている。

■最後に

○ 僕自身はいろんなことを勉強させてもらいながら、今日のことを頭において次に話すときにはまた内容が変わっていると。地域にいい情報を展開していきたい。もし皆さんから機会がもらえるなら僕はどこでもいきますので呼んでください。僕自身、勉強したいので。費用はいらないので、ボランティアで。もう一回り自分自身が大きくなると広がっていかないんじゃないかなと。今日はほんとにありがとうございました。

<全体日程と主な出来事>

「出張サロン in 清水」は、サロン 2002 と、「清水市サッカーのまち推進室」の共催という形で行われた。メインテーマは上記の通り。3つの事例報告を柱に、施設の見学や体験、懇親会、地元高校生とのフットサルなど、盛り沢山の1泊2日だった。

【時程】

8月25日(土)

13:30 JR清水市駅前集合

14:00～15:40 J－STEP施設見学会

15:50～18:20 事例発表1. 中塚義実「DUOリーグ」

事例発表2. 宮城島清也「地域クラブU-18－清水市の例」

18:30～19:00 アクアプール体験

19:00～21:00 懇親会1（於館内レストラン）

21:00頃～ 懇親会2（於316号室）

8月26日(日)

7:30 起床・朝食

8:30～9:30 朝からフットサル－10分×4本

出張サロン選抜軍(サロン2002+清水市の大人)vs 清水市の高校生

10:00～12:30 事例発表3. 山下則之「Jリーグユースチームの育成」

12:40 解散

その後はオプションとして、「エスパルスドリームプラザ」内の「清水サッカーミュージアム」及び「寿司ミュージアム」へ。

【J－STEP施設見学会】

清水市サッカーの町推進室（J－STEP内）の綾部美知枝さん（清水三羽ガラスの小学校時代の恩師）の案内で、まずは施設見学をさせていただいた。地下1階、地上4階の館内は、トレーニングジム、アクアプール、体育館のスポーツ活動部分と、宿泊室、レストラン、会議室の生活部分から構成されている。屋外はグラウンド2面、フットサルコート2面、そのまわりには800mのジョギングコースと、全体的に、狭いスペースの中に必要なものをうまくまとめたという感じ。太陽光を取り入れた館内のつくりなど、よく工夫されていると感じた。

実は7年前に、ある調査の関係で一度ここを訪れたことがある。ほとんど更地だった「ナショナルトレセン予定地」を、あの時も綾部さんに案内していただいた。福島県の「ナショナルトレセン」構想（Jヴィレッジ）が、東京電力の出資により一気に進行したのに対して、清水の「ナショナルトレセン」（J－STEP）は、構想としては早かったが、なかなか前に進まなかったという印象を持っている。清水市念願

の J - S T E P は、2002 年には日本代表のキャンプ地として、その後は清水市における総合型地域スポーツクラブの活動拠点となることが期待されている。

【アクアプール体験】

25m プールで泳いだり歩いたり。ジャグジー、サウナなど、たっぷりくつろいで 500 円は安い！ 清水市民も大勢利用していた。

旅人である我々は、束の間のひと時をゆったりした気分で過ごし、ビールに備えて正しく汗をかくことができた。良かった！

【懇親会 1, 2】

お楽しみの懇親会。館内レストランでの 1 次会は料理も GOOD！会話も GOOD！

場所を 316 号室へ移しての 2 次会では、アルコール原則禁止にもかかわらず、いい気分になっていた。公認 C 級コーチの講習会に来ていた高橋正紀氏(岐阜経済大)も途中から参加し、大いに盛り上がった。

【朝からフットサル】

2 面ある芝生のサッカー場の間にある人工芝のフットサルコート (2 面) は、もともと谷間だったところを埋め立てて作ったもの。ゲームは、炎天下のフットサルコートで行われた。

出張サロンチームは、浦和、熊谷、高妻、笹原、田中、中塚、松岡、宮城島の面々に、盛岡市の小沢氏、そして地元清水市の浄見さん(筑波大蹴球部元主将の浄見君のお父さん)と〇〇さん(すみません、名前忘れました)。対する高校生チームは、「事例報告 2」に出てきた、部活に入っていない地元清水の高校生。さすがは清水。なかなかやる。

しかし、勝敗を決したのは、清水の高校生のスキルの高さではなく、出張サロンチームのあまりの動きの鈍さであった…暑い…重い…

開始早々先制されるが、すかさず中塚が同点ゴール。1-1。

そのあとは、高校生に一方的に攻め込まれる。失点を重ねていくが、高妻メンタルコーチの励ましと「プラス思考」作戦によって暗い気分にはならない。しかも第 2 ペリオドからは、出張サロンチームは 6 人出ても良いことになった (多少強引に) し、最終ペリオドに至っては、11 人全員が一気に出場するという暴挙にも出た。だが、動いているのは高校生のみ。1-1 のあとは 13 点連続で高校生に取られ、終わってみれば 1-14 の完敗であった。

出張サロン史上最悪とも言える大敗であったが、おもしろかった。そのままビール飲んで一日終わり！

としたかったが、10時からは事例発表3が待っていた（事例発表の内容は後日まとめて報告します）。

【解散後－エスパルスドリームプラザにて】

解散後は、希望者（10名弱）でエスパルス「サッカー博物館」を見学した。ここは、エスパルスの出資会社である「鈴与」が建てたアミューズメント施設。清水駅前に人はいなかったが、ヨットハーバーもあるここには、老若男女、清水市内のあらゆる人々が集まっているような感じを受けた。

そしてそこに「サッカー博物館」がある。Jヴィレッジにも博物館があるが、それをもっと「清水サッカー」寄りにしたような感じ。だいぶ駆け足で見たつもりだったが「こんなに時間をかけて見ていった人たちは初めて」（宮城島氏）だったらしい。

腹が減ったので、館内にある「すし博物館」にて腹ごしらえ。しかし、寿司にありつくにはまず「寿司博物館入館券」を300円で購入しなくてはならない。3ヶ月間有効らしいが、旅人にとっては何のメリットもない。「この券で食べ放題」なら安いのだが…

館内は、新横浜のラーメン博物館のような感じ。寿司が食いたいだけにしては高くつくが、博物館に来たと思えば別にいいのかもしれない。

すいている寿司屋に入る。フットサルでは全く周りが見えていなかったO氏はなぜか寿司屋における状況判断鋭く、密度の濃い「マグロ盛り合わせ」を注文。何の気なしに店に入って「次郎長寿司」を頼んでしまった私は失敗したと思った。ビールをグビッとやって、ここでも満足！

帰り際、荒井さんが迷子(子ではないが)になるというハプニングもあったが、全員無事に清水駅へ。青春18切符の松岡、浦和、熊谷両氏は鈍行で、荒井、笹原、中塚は新幹線で、それぞれ清水をあとにした。

ちなみに熊谷さんは、この日は千葉の友人宅に泊まって、翌日から1年間、アメリカに留学するという。日本最後のイベントが「出張サロン in 清水」というのは、ええのか悪いのか… 清水の皆さん、ありがとうございました。参加された皆さん、ごくろうさまでした。